

漢籍担当職員講習会（中級）を受講して

原賀，可奈子
九州大学附属図書館利用者サービス課資料サービス係

<https://doi.org/10.15017/7387278>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2024/2025, pp.43-47, 2025-09-18. Kyushu University Library

バージョン：

権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International



漢籍担当職員講習会（中級）を受講して

原賀 可奈子[†]

【抄 録】 京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター（旧：京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター）主催の漢籍担当職員講習会（中級）について報告する。

【キーワード】 漢籍担当職員講習会、中級、京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター、漢籍目録

A Report on the Intermediate Level Practical Workshop for Librarians on Chinese Books

HARAGA Kanako

1. はじめに

前年度受講した京都大学人文科学研究所主催漢籍担当職員講習会（初級）に引き続き、2024（令和6）年10月28日～11月1日に同講習会の中級を受講することができた。初級受講後、漢籍の目録作成のハードルが下がり、本学所蔵の未登録漢籍を何点か登録したが、書誌登録の際には、同じタイトルの漢籍を所蔵している機関の書誌を流用して作成することが多く、新規でゼロから作成することはなかった。四部分類についても流用で事足り、みずから調べて入力することはほぼなかった。

中級では四部分類（経部・史部・子部・集部）について、それぞれ講義が行なわれるため、せめて少しでも受講前に予習（であるとともに初級の復習）をしておこうと、概略が掴めるような図書¹を一読してから臨んだ。結果的にはこのことが基礎知識となり、各講義を理解するうえでの助けとなった。

初級に関しては、前年度の研究開発室年報にて拙稿「漢籍担当職員講習会（初級）を受講して」²で報告したところである。今回は中級に関する受講報告を行なう。



図1 狩野直喜先生像³

2. 講習会概要

京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター（以下、「人文研」という）では、大学図書館・公共図書館・その他の図書館施設等において、漢籍（中国人によって書かれた漢文の書籍）の

[†] はらが かなこ 九州大学附属図書館利用者サービス課資料サービス係
(〒819-0395 福岡市西区元岡744) E-mail: haraga.kanako.374@m.kyushu-u.ac.jp

1 『目録学に親しむ：漢籍を知る手引き』[1]、『はじめての漢籍』[2]

2 初級の受講報告についてはこちらを参照のこと <https://hdl.handle.net/2324/7234648>

3 中庭に鎮座している、人文研の前身、東方文化学院京都研究所時代の所長・狩野直喜先生の胸像。初級・中級ともに、講義のところで先生の逸話が飛び出した。写真を撮ったのは最終日の午後で、あいにく雨が降り出したときだったため、雨に濡れる先生像となってしまった。

整理等の業務に従事する図書館職員を対象に、漢籍の取り扱いに関する知識と技術を普及し、学術資料としての漢籍の有効な利用体制の整備に資するために漢籍担当職員講習会を開催している。伝統的な漢籍目録の構造、全国漢籍データベースの内容についての講義、ならびにパソコンを利用した漢籍整理法に関する基礎的な講義・実習等を行う初級と、主として漢籍の分類（四部分類）に関する講義、ならびにパソコンを利用した漢籍整理法に関する高度な講義・実習等を行う中級の2種類があり、例年、それぞれ5日間の日程で、10月に初級、11月に中級が開催されている。

2024（令和6）年度の中級では、募集人数16名に対して、受講者は9名で、今回も受講者のほとんどが目録業務担当者であった。筆者以外の8名は同年度の初級受講者で、関西圏の機関の所属者だった。初級では全国各地の機関から、2倍近く受講者がいたことを考えると、各機関ともに、できるだけ多くの職員へ様々な研修を受講する機会を確保するためには、宿泊を伴う研修への参加は絞らざるを得ない事情が見えてくるようでもあった。

3. 四部分類について

『図書館情報学用語辞典 第5版』[3]では「四部分類」としての掲載はないが、「四庫分類法」として説明がされている。経部・史部・子部・集部の各部の概略がわかりやすいため引用する。「中国で最も普及した漢籍分類法で、経史子集の4部に分ける分類法。『隋書経籍志』（656年以後）に初めて現れた。それ以前の宮廷の蔵書分類は甲乙丙丁の4部からなり、乙が子で丙が史と順序が異なっていた。経部は儒教の経典とその注釈評論など、史部は歴史と地理に実際の政治や法律書、書籍や金石の目録も含む。子部は儒家と異なる諸子百家の書で、天文暦算や医薬、卜占陰陽、芸術、その他の雑著を含む。集部は詩文をはじめとした文芸作品とその評論、および文人学者の著作集と全集を収める。戯曲小説類は清以前は書物と認められなかったが、民国以後は重視され、集部に含める。清の乾隆帝（1711-1799）が天下の書を集め、『四庫全書』を編纂、各部のもとに類・属を設け、体系を整備した。」⁴とある。四部分類の経・史・子・集それぞれの説明としては同様であるが、講義では、四部分類のもととなったものとして、『漢書』の「芸文志」の六分類（六芸略、諸子略、詩賦略、兵書略、数術略、方技略）にも触れられている点が異なっている。

4. 講義・実習内容紹介

4.1. 1日目（10月28日）

4.1.1. 経部について（古勝隆一教授）

経部は四部分類の柱であるだけでなく、中国文化の中心となっているものだという。『漢書』「芸文志」の六芸略をルーツにもち、儒教など、生活や中国思想の規範となる書物が経部に分類されているため、日本の文化や思想に照らし合わせるだけではそのことを理解することは難しい。四部分類は春夏秋冬にもなぞらえられており、必ず経部から始まる。四部の経・史・子・集の各部は並列の関係ではなく、根底には経の思想がある、という話も興味深かった。そのような意味でも、国ごとの文化や思想の成り立ちを学ぶことは重要なものだと実感する。

講義では、四部分類のもととなった、『漢書』の「芸文志」で使われていた六分類についてや、経部のもととなった六芸略に含まれている経書類について、そして、辞書を意味する「小学」がなぜ六芸略、そして経部に含まれているのか、といったことについての解説があった。「小学」は子どもたちが文字や文章を覚えるためのものであり、経部を学ぶための基礎を身に着けるためのものであったため、経部に「小学」が含まれているのではないか、ということも興味深く、初学者にとっても、とっつきやすいように感じられた。

4.1.2. 叢書部について（藤井律之助教）

経・史・子・集の四部分類以外に、叢書部というものがある。叢書部は複数の著作がまとめられている書物であるが、比較的新しい分類で、各著作の属する部が異なり、ひとつの部に分類できないものである。逆に、同じ部に属する著作がまとめられているもので、類が異なるものは合刻、同じ部・類に属し、属が異なるものは叢刻とされている。また、人文研では、叢書部に分類するもの

4 [3] pp.90より

にはひとつのシリーズとしての総名がついているもの、という条件もある。何をもって叢書とするか、叢書部の分類をどのようにするかについては機関ごとに基準が異なっているということなので、各機関でどのような分類が取られているか、比較することによって、その機関の叢書の特色が見えてくるのも面白い。講義では、人文研のほか、国立国会図書館や東京大学東洋文化研究所、内閣文庫、東洋文庫、静嘉堂文庫の叢書部の分類の紹介があり、差異を知ることができた。

4.1.3. 叢書と漢籍データベース（安岡孝一教授）

初級に引き続き、実習の前に、漢籍データベースの入力をするための解説や近年の動向についての講義があった。今回は直前に叢書部の講義もあったため、「叢書の叢書」の叢書をどうやって表すか、など、考えさせられる話題も多かった。特に、NACSIS-CATでの書誌作成へのNCR2018適用を3日後（10月31日）に控えていたため、IFLA LRMの漢籍への適用検証の話はとても興味深かった。現時点でも、古典籍に関するNCR2018用のNACSIS-CATのコーディングマニュアルは公開されていないが、解釈方法なども含めて、改訂までには通常資料以上に困難が伴うことが察せられた。

4.2. 2日目（10月29日）

4.2.1. 史部について（古松崇志教授）

史部は経部と同じく『漢書』『芸文志』の六芸略にルーツをもつものである。四部分類中、最も数量が多いのが史部で、史書の増大に伴い、四部分類成立の際に独立した分類が作られたという背景がある。司馬遷の『史記』から始まり、明までの24の各王朝の正史（二十四史）を柱としている。『史記』については名称は知っていたものの、内容については今回初めて詳細を知った。全130巻の各巻の目次を紹介していただき、前漢までの時代の皇帝の「本紀」と、年表などの「表」、各テーマに沿った「書」や、地方政権の歴史である「世家」、各時代の人物の「列傳」が収録されていることを知る。列傳については、偉人の伝記のようなイメージがあったが、優れた官吏の列傳があるかと思えば酷い官吏の列傳などもあったり、異国に関する列傳もあったりするなど、自国と、自国を取り巻く歴史を幅広く捉えるために、正負を問わず、書き記す努力がされていたのだと感じた。

二十四史に関しては、新しい王朝に代わってから前の時代の史書を作成する、ということで、その時代の人たちの、前の王朝に対する感じ方を読み取ることができるという点も興味深かった。また、王朝の正当性の主張のために正史が作成されていたということで、史書の持つ重みを感じた。

4.2.2. 漢籍データ入力実習（1）

中級では、さっそく2日目の午後からデータ入力実習が始まった。初級では、カードに記入したのちに所定のエディタに入力していたが、中級ではカード記入は個人の自由に委ねられていたため、直接データ入力を行なった。「はじめに」で前述のとおり、この1年間で筆者が実務で作成した漢籍目録は他機関に同名タイトルの書物があり、他機関作成書誌を流用して作成したものが多かった。そのため、きちんと工具書にあたって裏付けを取ることも久しぶりだった。どのようなときにどの工具書を使えばいいか、現物にあたりながら、悩みながら調べていくのも1年ぶりのこと。しかも実習用に用意されている資料は確実に初級よりもレベルアップしていて悩ましかった。そんな状況を察してか、先生方が受講者の様子を見ながら助け舟を出してくださったり、話しかけやすい雰囲気を作ってくださっていたのはとてもありがたかった。

初級と同様に、あらかじめ用意された資料のなかから、各人が好きなものを手に取り、可能なかぎりの目録を取って入力していく形式だ。この日は1冊目から、経部に属する書物をまとめた書物に当たり、撰者や刊年の読み取りに苦戦した。この日は2点分の入力でやっとだった。

4.3. 3日目（10月30日）

4.3.1. 子部について（稲本泰生教授）

子部には経部・史部・集部に入らない分野のものが収録されており、内容はかなり幅広い。主には「諸子百家」と「技術書」で構成されているが、新しい技術なども子部に含まれていくため、子部の変遷を見ていくことで、その時代特有のものを見出すことができる、というところは特に面白く感じた。技術には、兵術、医術、天文算術といった、六分類では独立した分類とされていたもののほか、芸術、類書（百科事典）、仏教や道教などの儒教以外の經典などが含まれている。

余談であるが、この日は講義のあとに京都文化博物館を訪れた⁵。総合展示の一角で池大雅の絵画が展示されており⁶、竹の絵などもあった。講義で、子部には『芥子園画伝』のような絵画の教科書とされていた書物があり、日本でも池大雅や与謝蕪村が影響を受けていたという話や、絵画のマニュアルとして使われていた『竹譜詳録』といった書物があるという話を聞いたばかりである。日本文化とも結びついていることを実地で実感できたことも感慨深かった。

4.3.2. 漢籍データ入力実習 (2)

前日からの続きを行なった。この日は比較的目録を取りやすい資料に当たったようで、5点入力することができた。この日手に取ったもののなかには、虫喰い痕まで再現して作られた和刻本もあった。初級の際に、版木を彫る仕事をしている人は必ずしも内容を理解していたわけではない、という話があったが、現物を忠実に再現するために虫喰い痕まで彫ったのか、それとも虫喰い痕も何らかの意味を持っていると考えて写していたのか、気になるところである。

4.4. 4日目 (10月31日)

4.4.1. 集部について (道坂昭廣教授)

集部は文学作品の分類であり、詩賦略をもととしている。『漢書』『芸文志』の時代から、分類のひとつに割り当てられている文学だが、「文学」の枠組みも時代とともに変化し、集部を概観することによって、時代ごとの文学層の広がりを見ることができるといえる。時代によって変遷が見られる点は子部とも同じであり、子部とともに、比較的自由度の高い分類とも言える。

中国では散佚書となっている書物が日本では残っていることも多く、その意味でも、未遡及資料を登録することは重要だと聞いて、遡及入力の重要性を感じるとともに、目録担当としてのモチベーションが上がった。

4.4.2. 漢籍データ入力実習 (3)

この日は1冊目から、治水関係の書物をまとめた書物に当たったのだが、いくつか、四部分類に照らし合わせると別の属になるのではないかと思われるものがあり、叢刻に当たるのではないかと勘違いをして、この1点でエディタ入力にかなりの時間を割いてしまった。それでも6点分の入力を終えることができた。

4.5. 5日目 (11月1日)

4.5.1. 漢籍と情報処理 (Wittern, Christian教授)

テキストがどのように検索可能なものとして変容してきたのか、歴史の流れとともに解説があった。意外だったのは、聖書の話から始まったことだった。聖書の用語索引(コンコーダンス)を参考にして、昭和初期に『四書索引』『五経索引』など、漢籍のいくつかの索引が作成されている。英語のインデックスから、「引得」という言葉が作られていることも面白い。その後、CD-ROMやウェブでの検索ができる索引が作成されてきているが、漢籍の場合は漢字がネックとなるという。漢字コードができる前には、『大漢和辞典』の漢字番号で代行していた、という話もあり、先人の苦労が偲ばれた。現代では、ウェブやデータベース等で閲覧や検索ができるものが格段に増えて、便利に利用することができるが、これまでの検索ツールの進化の過程を踏まえると、とてつもない労力がかけられていることがわかった。いまだにコード化されていない漢字もあるそうで、漢籍のデータ化の難しさも感じた。

4.5.2. 実習解説 (楊維公助教)

2~4日目の午後に行なった漢籍データ入力実習の全点解説が行われ、今回も詳細な解答例と解説を紙媒体でもいただいた。準備されていた資料の点数だけを見ると、初級では41点、中級では29点と少なく感じられるが、受講者ひとりあたりで換算すると、中級のほうが量は増えている。3日間の実習の時間で、実際に13点の資料を手に取り、データ入力を行なうことができたが、総数の半

5 各地の美術館博物館を回ることも筆者の趣味のひとつである。京都文化博物館では水曜日・金曜日に20:30まで延長開館が行なわれており、ここぞとばかりに観覧に行った。ちょうどこの期間には石崎光瑤展が開催されていた。
https://www.bunpaku.or.jp/exhi_special_post/20240914-1110/ (参照 2025-08-01)

6 企画展示だった模様。https://www.bunpaku.or.jp/exhi_sogo_post/20240928-1124-2/ (参照 2025-08-01)

分にも満たなかったため、ここで全点の解説を聞くことができたことはとてもよかった。また、叢書部についての講義があったことともつながっているが、叢書類や合刻も多く、初級のときと比べて一筋縄ではいかなかったため、目録を取る際にどの部分に着目したらよいかの解説だけでなく、漢籍データベースに入力する際にどのように入力したらよいかまで明示していただけたので、漢籍データベースのデータ修正を計画している身としては、具体的に考えることができて、意欲につながった。

4.5.3. 情報交換（安岡孝一教授）

初級に引き続き今回も、事前に提出したアンケート用紙に記入されていた質問事項等を中心に、講習会を担当してくださった先生方から回答をいただいた。今回、受講生からの質問としては主に「人名等を知るのにおすすめの資料」「人文研での燻蒸・殺カビについて」の2点だったと記憶している。「人名等を知るのにおすすめの資料」は、まずは高校世界史の教科書とのこと。筆者の通っていた高校は少し特殊であるが、世界史の履修はAだったため、世界史の知識は概略的とならざるを得なかった（地歴は日本史Bか地理Bに重点を置いていた高校だったため、世界史の記憶は薄い）。高校の教科書やそれに類する参考書であれば、読み物としても容易に読み進めることができそうだ。燻蒸・殺カビについては、人文研では行なっていないようで、予防が重要である、ということは念を押されていた。人文研では湿度管理が重点的に行なわれているが、もしものときはアルコールでの対処を考えておられるようだ。本学ではカビの対処に悩まされており、予算面だけでなく殺カビに使用できる薬剤が減少していることから、アルコールを使用しての対症療法以外の対処法はなかなか難しいことを実感している。予防が最も大事だということは同感である。

5. おわりに

1年越しになったが、中級の講義を受講することができた。前年度に引き続き、研修に送り出してくれた本学に感謝である。

今年度は東京大学東洋文化研究所で開催されている漢籍整理長期研修を受講させていただいている。本学内でも、双方の研修を受講している職員はほとんどいないため、来年度は研修受講報告に加えて、双方の研修の比較もできればと考えている。また、漢籍整理長期研修の受講が完了すれば、図書館員として受講できる和漢洋古典籍関係の講習会を一通り受講できたことになる。こちらについても、次年度の報告記事で総括的なことを書ければと思っている。

末尾になりましたが、研修を開催し、受講生ひとりひとりに惜しみなく知識を授けてくださった京都大学人文研の先生方、円滑な運営を行なってくださった職員みなさまに、この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 古勝隆一, 宇佐美文理, 永田知之 (2017) 『目録学に親しむ：漢籍を知る手引き』 研文出版
- [2] 東京大学東洋文化研究所図書室 (2011) 『はじめての漢籍』 汲古書院
- [3] 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編 (2020) 『図書館情報学用語辞典 第5版』、丸善出版
<https://hdl.handle.net/2324/6942028> (参照 2025-08-01)



本著作の著作権は著者に帰属します。注があるものを除いて、本著作の内容物はクリエイティブ・コモンズ表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンスの下に提供されています。
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja>